

上州エコノファイル

64

太田国際貨物ターミナル開業15年

「内陸の港」として両毛地域の国際物流を担う太田国際貨物ターミナル(OICT、太田市清原町)が、こし開業から15年を迎える。昨年4月に海上輸出入の海上コンテナを扱うターミナルを新設。先月には輸出入貨物の検査機関が新たに入居するなど、インランドポートとして施設拡充を続ける。本県唯一の内陸港の新たな取り組みと今後の可能性を探った。(関口健太郎)



「全日検」が入居 所式が開かれた。OICT会長の清水聖義太田市長はあいさつで、強みを生かし、輸出入検査が従来より割安となるメリットを指摘。ことし4月、OICTが同市緑町で運営する海上コンテナターミナル内に、輸出入貨物の検査機関「全日検」が導入された。敷地内では大型トレーラー1台分のコンテナを動かせるOICTの「リースタック」が、国際港と同様の光景が広がる。内陸港として施設拡充を旨とする背景には、近年の取扱貨物量の減少がある。



荷物の搬入もOICTの専門スタッフが行う

拡充続ける内陸の港

6年続き減 OICTは太田市や太田商工会議所が出資する第三セクターとして1999年に開設された。2002年には東京税関前橋出張所太田派出所が開所。税関職員が常駐する両毛地域の物流拠点となった。しかし、ピークの07年度に2万2千件を超えていた通関件数実績は、リーマン・ショックや東日本大震災の影響を受けて08年度から6年連続で減少。同じ両毛地域の栃木県佐野市でも新たなインランドポートの開設構想が持ち上がり、将来的な競合の可能性が指摘される。OICTは施設の充実や付加サービスによる差別化を迫られている。

多彩なサービス 競争を勝ち抜くために提供するサービスは多彩だ。通常の荷物搬入はトラックの運転手が自で行うが、OICTでは専属のフォークリフト担当者が搬入して運転手負担を軽減。希望者への荷物の梱包も省いている。

や荷物の無料一時保管など、荷主の利便性を向上させてきた。県内で荷下ろしを終えたコンテナは帰りの道には空の状態では運ばれていたが、同ターミナルは空コンテナを活用。本県発の輸出貨物に転用し、輸送費の無駄も省いている。



ミツバロジスティクスはOICT開設時から輸出の一部を依頼している

消費増税も追い風に

通関重量 回復傾向はつきり 5年ぶり増

サービスに対する高 空港行きのシャトル便 主の評価も上々だ。ミツバロジスティクスは、自動車の中心とした「ワン・ストップ」の影響を受けた2008年度から6年連続で減少が続くが、昨年度は前年比4.02件減の1万3301件と微減にとどまった。通関重量は5年ぶりに前年を5850t上回るなど、回復傾向がはつきりしてきた。

東毛地区の製造業の好況や、OICTが相次いで付加サービスを提供していることなどが要因。大倉恒雄常務は、今後中小荷主の需要を掘り起こし、取扱量を増やしていきたいと話している。

空港行きのシャトル便 通常の輸出時には、港湾までのコンテナ輸送費が5万円なら4千円の消費税がかかるが、内陸港からの輸出入の費用が浮く。増税対策に各社が頭を悩ます時期だけに「免稅効果を生かして顧客獲得につなげた」と増税を新たなビジネスチャンスと捉えている。

